

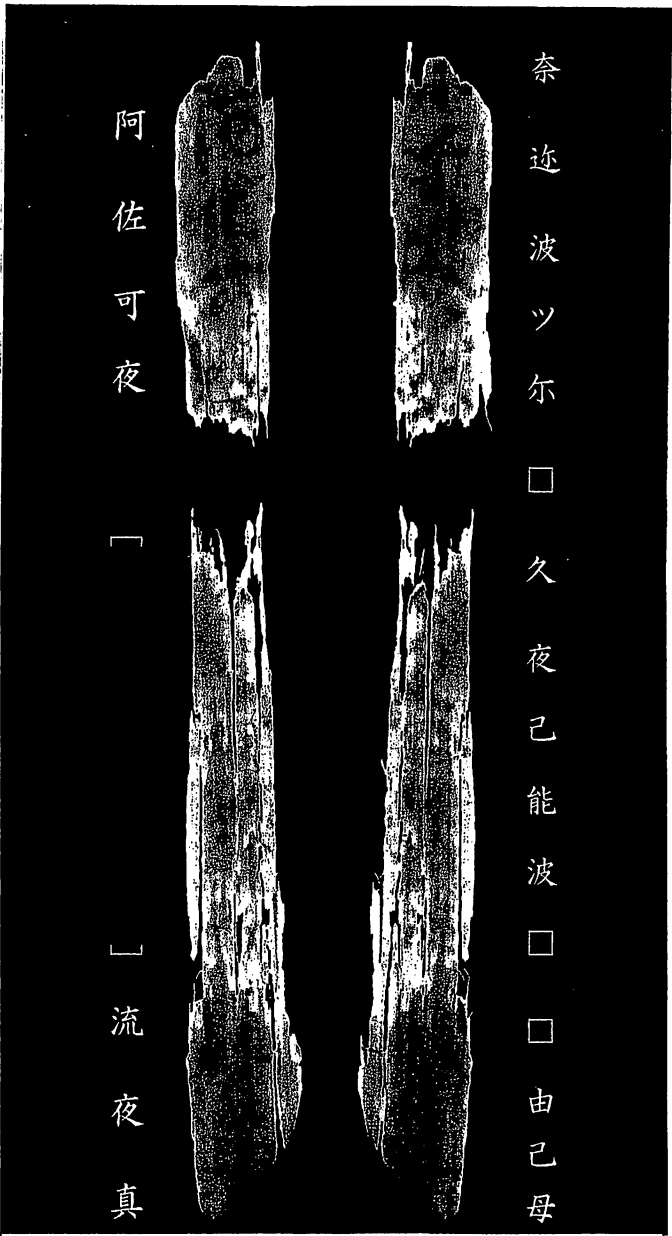
いま人麻呂歌集を考える

武庫川女子大学 毛利 正守

1、①難波宮出土の木簡



②紫香樂宮出土の木簡



出土木簡原寸写真

(デジタル撮影による赤外線写真) 撮影 奈良文化財研究所

③萬葉集卷16・三八〇七

安積香山影副所見山井之浅心乎吾念莫国

(西本願寺本萬葉集)

安積香山 影副所見 山井之 浅心乎 吾念莫国

右歌、伝云、葛城王遣于陸奥国之時、国司祇承緩念異甚。於時王意不悦怒色顯
レ面。雖レ設ニ飲饌ニ不肯宴樂。於是有前采女風流娘子。左手捧レ觴右手持レ水、擊之
王膝而詠此歌。尔乃王意解悦樂飲終日。

2、歌木簡の可能性あり

- ①皮留久佐乃皮斯米之刀斯（難波宮）
- ②奈尔波ツ尔作久矢己乃波奈（観音寺遺跡）
- ③奈尔波ツ尔佐兒矢己乃波奈□□^{（希中乙）}（石神遺跡）
- ④奈尔皮ツ尔佐久矢己乃皮奈泊由己母利伊真皮々留ア止／佐久□□（藤原宮）
- ⑤多々那都久（藤原宮）
- ⑥兒矢己乃者奈夫由己□利伊真者々留部止
夫伊己^{（希中乙）}冊利伊真役春部止作古矢己乃者奈（平城宮）
- ⑦目毛美須流安保連紀我許等乎志宜見賀毛美夜能字知可礼弓□（平城宮）
- ⑧玉尔有波手尔麻伎母知而／□□波□加□□□（平城宮）
- ⑨津玖余々美宇我礼□□□□□（平城宮）
- ⑩阿万留止毛宇乎弥可々多（平城宮）
- ⑪田□之比等等々流刀毛意夜志己々呂會（平城宮）
- ⑫□止求止佐田目手和□／□久於母閉皮（飛鳥池遺跡）
- ⑬波流奈礼波伊河志並万／由米余伊母波夜久伊和万始□止利河波志□（秋田城）
- ⑭奈迹波ツ尔□久夜己能波□□由己母
阿佐可夜」
〔流夜真（紫香樂宮）

3、木簡にみる漢詩・詩序

- ①山東□南落葉錦 巖上巖下白雲深 独对他郷菊花酒 破淚漸慰失侶心（平城宮）
- ②□□□風景於也
惜風□□

滑稽権大滑□（平城宮）

王勃の詩序「初春於権大宅宴序」（東野治之『正倉院文書と木簡の研究』より）

4、正倉院文書にみる訓字としての歌の例

□家之韓藍花今見者難写成嶋（天平勝宝元年（七四九）八月の背面）

5、①人麻呂歌集二つの書式あり

- a 天地^と 言名の絶^て 有^{はせ} 汝^と 吾^と 相事止^め（卷11・二四一九）
布細布^の 枕動^て 夜^も 不^レ 寐 思人^{には} 後^も 相物^を（卷11・二五一五）
「」の書式、およそ二一〇首弱あり
- b 巨椋乃 入江響奈理 射目人乃 伏見何田井尔 雁渡良之^之（卷9・一六九九）
雪己曾波 春日消良米 心佐閑 消失多列夜 言母不^レ 往来[」]（卷9・一七八二）
「」の書式、およそ一六〇首弱あり

②人麻呂歌集の研究史

a、契沖『萬葉代匠記』（精撰本、「惣釈」）

第十一ノ人麿家集ノ哥百四十九首八簡古ニカレタリ。是ハ彼集ノマニ写サレタリケルニヤ。

b、賀茂真淵「柿本朝臣人麻呂歌集之歌考序」、「柿本朝臣人麻呂歌集之歌考」（以上『賀茂真淵全集』三）
是より下百五十一首は人万呂哥集の哥なり、此哥集の歌こゝと次の巻七（今十）八（今七）にも多し、其書体助辞を不書して字数甚少く書なせしと、又常体に助辞をも書しと交りてあり、其人万呂集の本は、かくの如く助辞を略きて詩体にならふさまに書べきにあらず。人万呂は大力なる人と見ゆるに、其哥に一事もから言を用ゐざりし也、かゝる心にて哥は詩体をまねん事必有べからず。たゞ奈良人の中にも、ひとへにかゝる好みする人のわざとこそ見ゆれ。

c、武田祐吉『上代国文学の研究』（博文館、大正10・3）

人麻呂の長歌は六朝文学の影響を受けて居り、七夕の作も多量にある位で、人麻呂自身も多分漢字の素養があつた筈であるから、その集に多く漢意を用ゐたとてある人のいふ如く人麻呂に対する侮辱では無い。

d、石井庄司「人麻呂集考」（『国語国文の研究』22、昭3・6、のち『古典考究 万葉篇』八雲書店、所収）

唐好みと云はば云はるべき事どもは、あながち天平人を俟つまでもなく、遙か以前からあつたことを思ふ時、人麻呂集の漢語の字面、或は助辞を略して簡古に記されてゐることが、直ちに天平人のしわざと断ずることは早計であらうと思ふ。

e、沢瀉久孝「戲書について」（『国語国文の研究』22、昭3・6、のち『万葉学論纂』明治書院、昭6、所収）

今日の萬葉集の文字は原作者、或いは原本の文字を比較的忠実に伝へたものでないかと私は思ふ。（中略）要するにこの集二十巻をまとめた人は家持であると思ふが、その家持が既成未成の撰集家集などを二十巻によせ集めた時、すべては出来る丈原本の体裁を尊重したのではないかと考へられる。それは巻七、十、十一、十二などに散在してゐる人麻呂集の書式が、多少の相違はあるにしても、同じ巻の他の歌とは全然異つた書式である事やまた巻十六の竹取翁の歌が特に目に立つ用字法によつてゐる事などを以ても推し得られると思ふ。

f、高木市之助「人麿歌集の用字法と人麿的なものとの關聯について」（『国語と国文学』第27巻5号、昭25・5）

特色のある用字法を人麿歌集へ採用したのは誰であるか。（中略）一体このような用字法が、萬葉集中他にあまり見られず、人麿歌集歌にだけ遺つてゐるという事実は、この用字法が人麿歌集と無關係でない何よりの証拠であろう。（中略）このような用字法の性格が、言葉の忠実な記録には不向きな、随つてそれだけ又言葉の立体的な表現に向くものと考えられるならば、何より用字法の有つこのような性格自体が、極めて自然に人麿を指示するであろう。

g、久松潜一「柿本人麿」（『短歌講座』7、昭6・12）

人麿歌集の歌が巻一、二の人麿の歌に比して、熱烈であり、同じ恋愛をうたつても、はゞかつた追憶的な恋でなく、積極的な恋愛をうたつて居るのは、その若い時代の作であるためと思ふ。（中略）人麻呂歌集の歌が、その強い若々しい情熱がそのままに現れて居る所から見ても、人麿の初期の歌とするにふさはしいのである。この結論を誤ないものとするれば人麿歌集の歌によつて若き人麿が明らかになるのである、人麿作の歌とあるものによつてそれ以後の人麿が明らかにせられるのである。

h、斎藤茂吉『柿本人麿評歌集』(岩波書店、昭14・2)

人麿歌集の書体に特色があつて、助詞を省略して、極めて簡単に書いたのが可なりある。(中略)近時、沢瀉・石井・武田氏等諸学者の考察によつて、この書体も、原作者(人麿)の用字法を伝へたものではないからうかといふようになった。

果してさうならば、なぜ斯う助詞等を省いて簡潔に書いたかといふに、これは作者(人麿)自身の覚えのための、手控の如きものであつたために、簡単に漢字だけ並べても役に立つたものと見える。そしてその中に、助詞を書いたものもあり、また巻九の他人の歌などには相当に助詞を加えてあるのは、自分の歌よりも他人の歌の方は備忘のためには稍丁寧ていねいに取扱ふ傾があるのであらう。

i、阿蘇瑞枝「人麿集の書式をめぐつて」(『萬葉』20、昭31・7)、「人麻呂歌集における用字の一特性」(『古代文学』1、昭36・12)、『柿本人麻呂論考増補改訂版』(おうふう、平10・3)

非略体の方には宮廷関係・叙景などの公の歌が多く、略体の方には私的な男女関係の歌が圧倒する。

内容上、略体歌よりも非略体歌の方が遙かに人麻呂作歌に近い。

略体歌に「矣」とか「哉」とかの正訓の文字をできるだけ使用しようとする傾向があつたのに対して、非略体歌においては、歌詞を忠実に伝えようとする注意が払われている。

両者の用字の傾向をみると、非略体歌が、音を表わすことを主としているとも考えられるのに対して、略体歌では、歌の意を表わすことを主としているらしい。

j、神田秀夫『人麻呂歌集と人麻呂伝』(塙書房、昭40・4)

私は人麻呂の用字法に、略体と非略体と両様あるのは、おなじ一人の人麻呂の草稿と浄書だらうと思ふ。

(中略)略体は謂はば馬上体、乃至、枕上体なのだと思ふ。(中略)非略体は謂はば、机上体、その性質からいへば啓上体といったものだらうと思ふ。

k、渡瀬昌忠「万葉集における人麻呂歌集の採録」(『萬葉』62、昭42・1)、『柿本人麻呂研究歌集編上』

(桜楓社、昭48・11)、「人麻呂歌集略体歌の助辞表記―文字化と読添え―」(『萬葉』131、平元・3)、「人麻呂歌集略体歌における接続助詞の表記をめぐつて―「雖」ととも「者・バ」「テ」の文字化と読添え―」(『万葉集研究』18、平3・5)

万葉集各巻所載の人麻呂歌集歌は、巻二・三・七・九・十・十一・十二において、ほぼ原本通りの書式をもつて採録されたとしてよいであらう。

「雖た不ならず直ととも」のような漢文的反転表記が、略体歌に徹底して用いられる。

略体歌と非略体歌との間、非略体歌と人麻呂作歌との間、そして略体歌と人麻呂作歌との間の、対立相違点を見ると同時に、それらの共通点をも見、三者を総合的にとらえる視座を確保しなければならぬ。

人麻呂歌集略体歌において、必ず文字化される助辞は、意味の強い助辞、歌意に影響する力の強い助辞であり、必ず読添えとされる助辞は、意味の強くない助辞、文脈上容易に読添えうる助辞である。

人麻呂歌集略体歌の表記者は決して漢文体・詩体で和歌を書こうとしたわけではない。

人麻呂歌集略体歌における読添え表記の成因を単に「用字法の未分化」や「記号としての文字の文飾化の未熟」のみに限定してしまえない疑問点が残るのである。

1、東野治之『書の古代史』(岩波書店、平6・12)

「あざむかむやも」(いつわりであらうか)という文章が、一字一音の仮名ではつきりと記されている。

とである。この木簡は(中略)天智天皇の大津宮時代のものと推定されており(中略)、広く支持されている妥当な推定といていい。大津宮の時代といえ、柿本人麻呂の活躍した天武・持統朝より一世代古いことは、いうまでもない。(中略)この木簡からすれば、漢字の訓も相当固定していて、漢文の訓読も盛んだったとみてよいのではないか。おそらく日本語を書き表す方法は、古くからいくつか出来上がっていて、それらが時に応じて使い分けられたり、併用されたのだろう。

m、工藤力男「人麻呂の表記の陽と陰」『萬葉集研究』20、平6)

古体表記から新体表記へ、そして作歌の表記へと変遷したことを、人麻呂という一個人の表記に限って認めよう。

古体歌には、(中略)特に短歌は民謡そのものではなく、ある種の変形が施されているだろうが、その作業の初めから古体表記で書き留めていったと考えるのは現実的ではない。まず音形を忠実に書き留め、後に彼の表記原則に従って書き改めたことになる。ならば、最初の記録は何によったかと考えると、どうしても仮名を含む表記を想定せざるを得なくなる。古体歌記定の経過をこのように考えると、音仮名表記を前提とする方が自然に解釈できるのである。

n、稲岡耕二「人麻呂歌集の筆録とその意義」『国語と国文学』46巻10号、昭44・10)、「文字のうたの成立」(『日本通史』5の月報17、平7)、「総訓字表記への志向とその転換」上下(『萬葉集研究』21・22、平9・10)、「声と文字序説—人麻呂歌集古体歌の時代—」(『声と文字 上代文学へのアプローチ』塙書房、平11・11)「人麻呂歌集と人麻呂」『セミナー 万葉の歌人と作品』2、和泉書院、平11・9)

略体・非略体という呼称を不適當だと思うのは、右のようにそれが表記者の意識とはかけ離れた名称であり、表記史の上から仮りに名付けるとすれば、古体と新体と言うべきものだとして理解するからである。

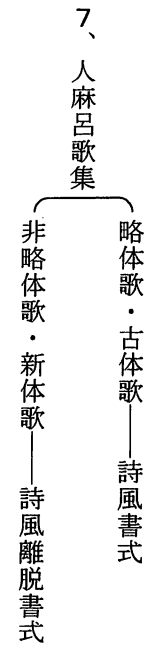
人麻呂歌集古体歌・新体歌・人麻呂作歌の順序で漢字による歌が制作され、日本の文字の歌がはじめて立ちあげられた時に、漢字は日本語を書く為に作られたのではないという意識はいつそう磨かれたはずであろうし、その断念のうえに音仮名で(辞)を記す方法も考案されたのだろう。

「実際には文章が仮名書きされることもあった」と記すのは「阿佐ム加ム移母」という音仮名注による推定として間違いであろうことを指摘したい。北太津木簡の背後に音仮名表記の「文章」を想定することはできないし、まして「日本語を書き表す方法は、古くからいくつか出来上がっていて、それらが時に応じて使い分けられ」たり、うたの文字化が自由になされたりしたとは、考え難い。

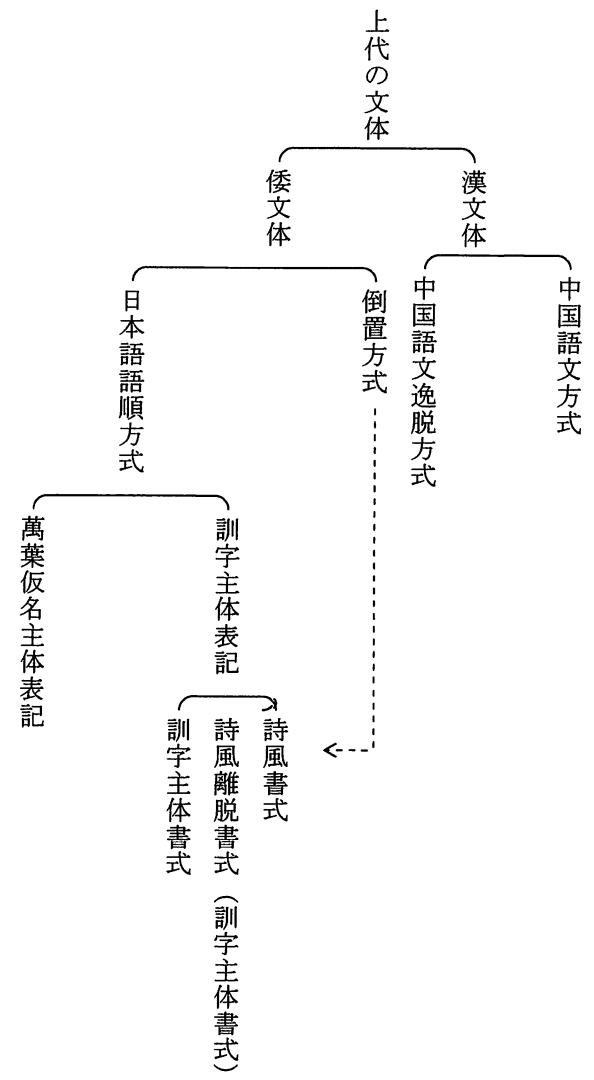
人麻呂歌集古体歌に、(用例略)など、漢文に近い、テニヲハの文字化の乏しい作品を多数見るのは、その直後の天武朝の営為として自然に思われる。(中略)「我袖^カ電^カ手走」や「峯朝霧過兼鴨」を、「^カ兼」という仮名が一字混入しているということ以上に私が重視するのは、総訓字表記という、漢字の用法として、漢詩の制作の場合に近い文字利用から、異質の段階へ進んだことを見るからである。そこに至るまでに、古体歌制作のさまざまな体験が活かされていると思われる。

漢字の不思議な力に魅せられた上代の知識人たちにとって、漢詩漢文の模倣を通して、漢詩に対抗しうる文字の歌を創り出すとすれば、漢字の表意性を利用し、漢詩のように歌を表現すること以外に考えられなかったとするのが、むしろ自然ではなからうか。日本の歌だからかといって、最初から仮名^{カナ}書きを選択し、志向することの方が、かえってありえないように思われる。

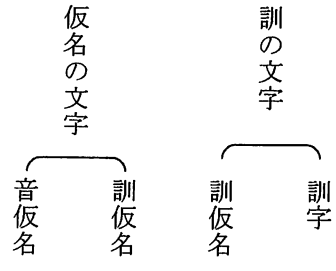
6、日常的な木簡等の歌表記等に対して、歌集を編むことの意味



8、次の分類は、「上代の文体」に人麻呂歌集の書式をとり入れたもの



9、人麻呂歌集「詩風書式」に用いられる文字は、全体的に「訓の文字」である



10、人麻呂歌集「詩風書式」に少数ながら認められる音仮名

①地名などの固有名

- 大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉(巻7・一二四七)
- 安治村 十依海 船浮 白玉採 人所知勿(巻7・一二九九)
- 吉哉 雖不直 奴延鳥 浦嘆居 告子鳴(巻10・二〇三二)
- 玉久世 清川原 身祓為 齋命 妹為(巻11・二四〇三)

紐鏡 能登香山 誰故 君来座在 紐不開寐(卷11・二四二四)
千早人 宇治度 速瀬 不相有 後我嬾(卷11・二四二八)
秋柏 潤和川辺 細竹目 人不顔面 公無勝(卷11・二四七八)
路边 老師花 灼然 人皆知 我恋嬾(卷11・二四八〇)

②自立語

吉惠哉 不来座公 何為 不獸吾 恋乍居(卷11・二三七八)
我勢古波 幸座 遍来 我告来 人来鴨(卷11・二三八四)
伊田何 極太甚 利心 及失念 恋故(卷11・二四〇〇)
是川 水阿和逆纏 行水 事不反 思始為(卷11・二四三〇)
言出 云忌々 山川之 当都心 塞耐在(卷11・二四三二)
若月 清不見 雲隱 見欲 宇多手比日(卷11・二四六四)
平山 子松末 有廉叙波 我思妹 不相止去(卷11・二四八七)
飛鳥川 奈川柴避越 来 信今夜 不明行哉(卷12・二八五九)〈柴避〉異同あり

③付属語

人所寐 味宿不寐 早敷八四 公目尚 欲嘆(卷11・二三六九)
見渡 近渡乎 廻 今哉来座 恋居(卷11・二三七九)
我勢古波 幸座 遍来 我告来 人来鴨(卷11・二三八四)
吾背兒我 浜行風 弥急 急事 益不相有(卷11・二四五九)
平山 子松末 有廉叙波 我思妹 不相止去(卷11・二四八七)

11、人麻呂歌集「詩風書式」において、基本的にいづれも倒置方式(漢文・漢詩風)をとるもの

- ①心 千遍雖念 人不云 吾恋嬾 見依鳴(卷11・二三七一)
- ②紅 衣染 雖欲 著丹穗哉 人可知(卷7・二二九七)
- ①秋山 霜零覆 木葉落 歲雖行 我忘八(卷10・二三四三)
- ④出見 向岡 本繁 開在花 不成不止(卷10・一八九三)
- ⑤雷神 小動 刺曇 雨零耶 君將留(卷11・二五二三)
- ⑥雲谷 灼発 意追 見乍居 及直相(卷11・二四五二)
- ⑦玉響 昨夕 見物 今朝 可戀物(卷11・二三九一)

12、人麻呂歌集「詩風離脱書式」(所謂非略体歌、以下同じ)においては、「詩風書式」とは異なって、倒置方式(漢文・漢詩風)をとらないものも存在する

- ①璞之 年者竟杼 敷白之 袖易子少 忘而念哉(卷11・二四一〇)
- ②高嶋之 阿渡川波者 驟鞞 吾者家思 宿加奈之弥(卷9・一六九〇)
- ③春山者 散過去鞞 三和山者 未含 君待勝尔(卷9・一六八四)
- ④吾恋 妹相佐受 玉浦丹 衣片敷 一鴨將寐(卷9・一六九二)
- ⑤君不来者 形見為等 我二人 殖松木 君乎待出牟(卷11・二四八四)
- ⑥君不相 久時 織服 白袴衣 垢附麻豆尔(卷10・二〇二八)

13、人麻呂歌集「詩風書式」において、一首の各句の文字数が同じもの(結果的に同じになったか)

- ①春楊 葛山 發雲 立座 妹念 (卷11・二四五三)

- ② 打日刺 宮道人 雖滿行 吾念公 正一人 (卷11・二三八二)
- ③ 夜不寐 安不有 白細布 衣不脫 及直相 (卷12・二八四六)
- ④ 白細布 我紐緒 不絶間 戀結為 及相日 (卷12・二八五四)

14、人麻呂歌集「詩風書式」では、二音節の助詞については表記する場合(あくまで「訓の文字」)あり。

一音節の助詞は、表意のものを除いて基本的に表記なし

- ① 冬隠 春開花 手折以 千遍限 恋渡鴨 (卷10・一八九二)
- 磯上 生小松 名惜 人不_レ知 恋渡鴨 (卷12・二八六一)
- ② 金山 舌日下 鳴鳥 音谷聞 何嘆 (卷10・二二三九)
- 直不_レ相 有諾 夢谷 何人 事繁 (卷12・二八四八)
- ③ 誰彼 我莫問 九月 露沾_乍 君待吾 (卷10・二二四〇)
- 後相 吾莫恋 妹雖_レ云 恋間 年経_乍 (卷12・二八四七)
- 是耳 恋度 玉切 不_レ知_レ命 歳経_管 (卷11・二三七四)
- ④ 山菅 乱恋耳 令_レ為_乍 不_レ相妹鴨 年経_乍 (卷11・二四七四)
- 核葛 後相 夢耳 受日度 年経_乍 (卷11・二四七九)
- ⑤ 玉切 及_レ世定 侍 公依 事繁 (卷11・二三九八)
- 桜花 開哉散 及_レ見 誰此 所_レ見散行 (卷12・三一二九)
- ⑥ 白玉 纏持 從_レ今 吾玉為 知時谷 (卷11・二四四六)
- 白玉 從_レ手纏 不_レ忘 念 何畢 (卷11・二四四七)

15、人麻呂歌集「詩風書式」における表意の助詞の在りよう

- ① 網引為 海子哉見 飽浦 清荒磯 見来吾 (卷7・一一八七)
- 公目 見欲 是二夜 千歳如 吾恋哉 (卷11・二三八一)
- 桜花 開哉散 及_レ見 誰此 所_レ見散行 (卷12・三一二九)
- ② 是山 黄葉下 花矣我 小端見 反恋 (卷7・一三〇六)
- 秋夜 霧発渡 凡_々 夢見 妹形矣 (卷10・二二四一)
- 人言 繁時 吾妹 衣有 裏服矣 (卷12・二八五二)

16、文選における表意の助辞

- ① 黄鳥為悲鳴 哀哉傷_二肺肝_一 (文選卷二十一、三良詩、曹子建)
- 勉哉修_二令德_一 北面自寵珍 (文選卷二十三、贈_二五官中郎將_一、劉公幹)
- 惜哉時不_レ与 日暮無_二輕舟_一 (文選卷二十六、奉_二答内兄希叔_一、陸韓卿)
- ② 心事俱已矣 江上徒離憂 (文選卷二十、新亭渚別_二范零陵_一詩、謝玄暉)
- 行矣怨_二路長_一 怒焉傷_二別促_一 (文選卷二十四、贈_二弟士龍_一、陸士衡)
- 蓬心既已矣 飛薄殊亦然 (文選卷二十七、北使_レ洛、顔延年)

17、人麻呂歌集「詩風書式」における表意の付属語と、訓仮名の付属語・自立語の在りよう

- ① 鳥玉 彼夢 見継哉 袖乾日無 吾戀矣 (卷12・二八四九)
- ② 新治 今乍路 清 聞鴨 妹於事矣 (卷12・二八五五)
- ③ 吉哉 雖_レ不_レ直 奴延鳥 浦嘆居 告子鳴 (卷10・二〇三二)

- ④ 水上 如_二數書_一 吾命 妹相 受_二日鶴鴨_一 (卷11・二四三三)
 ⑤ 金山 舌_二日下_一 鳴鳥 音谷聞 何嘆 (卷10・二二三九)
 ⑥ 現 直_レ不_レ相 夢谷 相見与 我戀國 (卷12・二八五〇)

18、人麻呂歌集「詩風離脱書式」における表意の付属語と、訓仮名及び音仮名の付属語・自立語の在りよう

- ① 河蝦鳴 六田乃河之 川楊乃 根毛居侶雖_レ見 不_レ飽河鴨 (卷9・一七二三)
 ② 為_レ我登 織女之 其屋戸尔 織白布 織弓兼鴨 (卷10・二〇二七)
 ③ 敷袴之 衣手離而 玉藻成 靡可宿濫 和乎待難尔 (卷11・二四八三)
 ④ 皇祖乃 神御門乎 懼見等 待從時尔 相流公鴨 (卷11・二五〇八)
 ⑤ 雪己曾波 春日消良米 心佐閑 消失多列夜 言母不_レ往来 (卷9・一七八二)
 ⑥ 衣手乃 名木之川邊乎 春雨 吾立沾等 家念良武可 (卷9・一六九六)

19、人麻呂歌集 詩風書式の助詞「も」 表記なし (漢文・漢詩に「も」にあたる表記なし)

- ① 恋死 恋_も死耶 玉梓 路行人 事_も告無 (卷11・二三七〇)
 ② 立座 態_も不_レ知 雖_レ念 妹不_レ告 間使_も不_レ来 (卷11・二三三八)
 ③ 我妹 恋度 劍刀 名惜_も 念不得_も (卷11・二四九九)
 ④ 夜_も不_レ寐 安_も不_レ有 白細布 衣不_レ脱 及_二直相_一 (卷12・二八四六)

20、人麻呂歌集 詩風離脱書式の助詞「も」は仮名書き (漢文・漢詩に「も」にあたる表記なし)

- ① 古尔 有_レ險人母 如_二吾等_一架 弥和乃檜原尔 挿頭折兼 (卷7・一一一八)
 ② 神南備 神依板尔 為_レ杉乃 念母不_レ過 恋之茂尔 (卷9・一七七三)
 ③ 夕星毛 往来天道 及_二何時_一鹿 仰而將待 月人壮 (卷10・二〇一〇)
 ④ 竿志鹿之 心相念 秋芽子之 鍾礼零丹 落僧惜毛 (卷10・二〇九四)

・人麻呂作歌及びそれ以外の歌の助詞「も」、またこのあと見る助詞「と」の表記 (並列の意は別) は基本的に仮名書き

21、漢文・漢詩に、「も」にあたる助辞は基本的になし

- ① 側同_二幽人居_一 郊扉常昼_も閉 (文選卷二十六、贈_二王太常_一、顔延年)
 高閣常昼_も掩 荒堦少_二諍辞_一 (文選卷二十六、在_レ郡臥_レ病。呈_二沈尚書_一、謝玄暉)
 ② 書記既翩翻 賦歌_も能妙絶
 相如_も慙_二温麗_一 子雲_も慙_二筆札_一 (文選卷二十六、奉_二答内兄希叔_一、陸韓卿)
 ③ 石泉漱_二瓊瑤_一 織鱗_も亦浮沈 (文選卷二十二、招隱詩、左太冲)
 卑高_も亦何常 升降_も在_二一朝_一 (文選卷二十六、河陽泉作、潘安仁)

22、人麻呂歌集 詩風書式の助詞「と」 表記なし (漢文・漢詩には「与」もあるが、多くは表記なし)

- ① 吾妹子_と 見偲 奥藻 花開在 我告与 (卷7・一二四八)
 ② 安治村 十依海 船浮 白玉採_と 人所_レ知勿 (卷7・一二九九)
 ③ 健男 現心 吾無 夜昼_と不_レ云 恋度 (卷11・二三七六)
 ④ 桜花 開哉散_と 及_レ見 誰此 所_レ見散行 (卷12・三二二九)

23、漢文・漢詩には、助詞「と」にあたる助辞「与」もあるが、多くは表記なし

① 玉水記「方流」と 琬源載「円折」と

蓄_レ宝每希_レ声 雖_レ秘_と猶彰_レ徹 (文選卷二十六、贈_三王太常_一、顔延年)

② 寄_三言_對羅者_一 寥廓已高翔_と (文選卷二十六、暫使_二下都_一、夜發_三新林_至京邑_一。贈_三西府同僚_一、謝玄暉)

玄暉)

③ 還聞_三稚子說_一 有_レ客款_三柴扉_一

儻從_三皆珠玑_一 裘馬悉_レ輕肥

軒蓋照_三墟落_一 伝瑞生_と光輝_一

疑是_レ徐方牧_と 既是_と復疑_レ非_と (文選卷二十六、贈_三張徐州謨_一、范彦龍)

④ 誰謂_三晉京遠_と 室邇身_レ夷遠

誰謂_三邑宰輕_と 令名患_レ不_レ劾 (文選卷二十六、河陽臯作、潘安仁)

⑤ 春華_与秋実_一 庶子_及家臣_一 (文選卷二十六、奉_三答内兄希叔_一、陸韓卿)

恨_不下具_三雞黍_一 得_中与_三故人_一揮_上 (文選卷二十六、贈_三張徐州謨_一、范彦龍)

24、人麻呂歌集 詩風書式では「与」は助詞「こそ」に用いる

① 吾妹子 見_レ偲 奥藻 花開在 我告_与 (卷7・一二四八)

② 里遠 眷浦_経 真鏡 床重不_レ去 夢所_レ見_与 (卷11・二五〇一)

③ 現 直不_レ相 夢谷 相見_与 我恋国 (卷12・二八五〇)

25、人麻呂歌集「詩風書式」の助詞のもう一つの在りよう(表記なし)

ノの例

是_の山_の 黄葉_の下_の 花矣我 小端見 反恋 (卷7・一三〇六)

管_の根_の 惻隱君 結為 我紐_の緒 解人不_レ有 (卷11・二四七三)

路_の邊_の 壹師_の花_の 灼然 人皆知 我戀_の嬾 (卷11・二四八〇)

白細布_の 我紐_の緒_の 不_レ絶間 恋結為 及_三相日_一 (卷12・二八五四)

ニの例

心_には 千遍_に雖_レ念 人_に不_レ云 吾恋_の嬾 見依鴨 (卷11・二三七二)

何_為に 命繼 吾妹_に 不_レ恋_前に 死物 (卷11・二三七七)

我妹_に 戀無_レ乏 夢_に見 吾雖_レ念 不_レ可_レに_レ寐 (卷11・二四二二)

妹_に戀 不_レ寐_朝に 吹風 妹_にし 經者 吾_{にも} 与_経 (卷12・二八五八)

テの例

立_て座_て 態不_レ知 雖_レ念 妹不_レ告 間使不_レ来 (卷11・二三八八)

中_々 不_レ見_有從 相見_ては 恋心 益_て念 (卷11・二三九二)

戀事 意追不_レ得_て 出_て行者 山川 不_レ知_来 (卷11・二四一四)

真珠服 遠兼_て 念 一重衣 一人服_て寐 (卷12・二八五三)

ノとテの例

出_て見 向_の岡 本繁 開在_の花_の 不_レ成不_レ止 (卷10・一八九三)

珍_の海_の 浜边_の小松 根深_て 吾恋_度 人_の子姪 (卷11・二四八六)

人の所見 表結て 人の不見 裏紐開て 戀日太(卷12・二八五二)
ノとニの例

海神の 手に纏持在 玉故に 石の浦廻に 潜為鴨(卷7・二三〇一)
山代の 石田の社に 心鈍 手向為在 妹に相難(卷12・二八五六)
磯の上 生小松の 名惜 人に不知 戀渡鴨(卷12・二八六一)

26、漢文・漢詩における助辞「之」「於」「而」「等」のあり方

① 孝悌天下之大順也。力田為生之本也。三老衆民之師也。廉吏民之表也。朕甚嘉此三大夫之行。今萬家之縣云無不應令。(漢書、卷四)
將百官之奉養或費。無用之事或多與。何其民食之寡乏也。(漢書、卷四)

② 朕得下識昭穆之序。寄遠祖之思。今年大禮復舉。加以先帝之坐。(中略) 豈亡克慎肅雍之臣辟公之相。(後漢書、卷二)

年已十三有成人之志。親德係後莫宜於祐。禮昆弟之子猶己子。春秋之義為人後者為之子。(後漢書、卷五)

③ 振美於辰。已盛於巳。罌布於午。味薹於未。申堅於申。(漢書、卷二十一上)
其五十八人言當涉之義皆著於經傳。同於上世便於吏臣。(漢書、卷二十五下)

④ 政非惠和不閔於心。制非舊典、不訪於朝。(中略) 不功着於大漢。碩惠加於生人。(後漢書、卷十七)

發謀於元封。啓定於天鳳。積百三十年。是非乃審及用。四分亦於建武。施於元和。訖於永元。七十餘年。(後漢書、卷十二)

⑤ 是從事焉。尚寡而吏未加務也。吾詔書數下歲勸民種樹。而功未興。是吏奉吾詔不勤而勸民不明也。(漢書、卷四)

日肇化而黃至。丑半日牙化而白人統受之於寅初。日肇成而黑至。寅半日生成而青。(漢書、卷二十一上)

⑥ 古之人論數也。曰物生而後有象。象而後有滋。滋而後有數。(後漢書、卷十一)

朕聞古先聖王先天而不違。後天而奉天時。(中略) 在斗二十二度。而曆以為牽牛中星。(中略) 而以折獄斷大刑。(後漢書、卷十二)

⑦ 臣植言。臣自抱。婦藩。刻肌刻骨。追思罪戾。昼分而食。夜分而寢。誠以天網不可重羅。聖恩難可再恃。竊感相鼠之篇。無禮遺死之義。形影相弔。五情愧赧。(文選卷二十、上責躬應詔詩表、曹子建)

⑧ 然後知。聃周之為虛誕。嗣宗之為妄作也。昔騶驥倚軸於吳坂。長鳴於良樂。知與不知也。百里奚愚於虞。而智於秦。遇與不遇也。(文選卷二十五、答盧諶詩、竝書、劉越石)

⑨朗陵公何敬祖、咸之從內兄、国子祭酒王武子、咸從姑之外孫也。竝以明德見重於世。咸親之重レ之情猶三同生、義則師友。何公既登侍中、武子俄而亦作。二賢相得甚歡、咸亦慶レ之。然自恨闇劣、雖願其繼繼、而從レ之末由。(文選卷二十五、贈何劭・王濟詩、竝序、傅長虞)

赫赫大晋の朝 明明として闕皇闈を

吾兄既鳳翔 王子亦龍飛

雙鸞遊蘭渚に 二離揚清暉を

携して手升玉階に 竝して坐を侍丹帷に

金璫を綴恵文に 煌煌として発令姿に

斯の榮非攸レに庶 繼繼情の所レ希

⑩小隱隱二陵藪に 大隱隱二朝市に

伯夷竄二首陽に 老聃伏二柱史に

昔在二太平の時に 亦有二巢居の子に

今雖二盛明の世に 能無二中林の士に

放二神青雲の外に 絶二迹窮山の裏に

鷓鴣先レ晨に鳴 哀風迎レて夜を起 (文選卷二十二、反招隱詩、王康琚)

⑪奉レて辞馳レて出境を 伏レて軾に逕入レ関に

秦王御レ殿に坐 趙の使擁レて節を前

揮レて袂を睨二金柱に 身玉を要二俱捐に

連城既偽レて往 荆の玉亦真還

爰に在二涓池の会に 二主克交レ歡を (文選卷二十一、覽古詩、盧子諒)

⑫遵レて渚に攀二蒙密を 随レて山上に嶇嶽に

睇レて目有二極覽に 遊レて情を無二近尋に

聞レ道雖二已積に 年力は互に頽侵

探レて己を謝二丹黻を 感レて事に懷二長林を (文選卷二十、樂遊應レ詔詩、范蔚宗)

27、人麻呂歌集「詩風離脱書式」の助詞の在りよう

ノとニの例

古尔 有險人母 如三吾等二架 弥和乃檜原尔 挿頭折兼 (卷7・一一一八)

ノとテの例

吾恋 孀者知遠 往船乃 過而応レ来哉 事毛告火 (卷10・一九九八)

テとニの例

遠有而 雲居尔所レ見 妹家尔 早将レ至 歩黒駒 (卷7・一二七二)

ノとニとテの例

天雲尔 翼打附而 飛鶴乃 多頭々思鳴 君不レ座者 (卷11・二四九〇)

28、人麻呂歌集「詩風書式」と文選との関わり

①息緒 吾雖レ念 人目多社 吹風 有數々 應レ相物 (卷11・二三五九)

願為「西南風」長逝入「君懷」(文選卷二十三、七哀詩、曹子建)

契沖『萬葉代匠記』(精撰本)に「曹子建七哀詩云。願為「西南風」、長逝入「君懷」」を引用する。

②月見 國同 山隔 愛妹 隔有鴨(卷11・二四二〇)

美人遭兮音塵闕 隔千里兮共明月。(文選卷十三、月賦、謝希逸)

契沖『萬葉代匠記』(精撰本)に「謝希逸月賦云。隔千里兮共明月。鮑明遠詩云。三五二八時、

千里與「君同」。(初稿本に「文選謝希逸月賦曰。隔千里兮共明月。唐李嶠百詠云。三五二八夜、

千里與「君同」。謝觀白賦云。夜登「庾之樓」月明「千里」。)を引用する。

29、人麻呂歌集「詩風書式」と文選における語句の共通性

①遠近 礪中在 白玉 人不_レ知 見依鴨(卷7・一三〇〇)

出沒眺_レ樓雉 遠近送_レ春目(文選卷三十、和_二王著作八公山_一、謝玄暉)

②行行 不_レ相妹故 久方 天露霜 沾在哉(卷11・二三九五)

行行重行行 與_レ君生別離(文選卷二十九、雜詩 古詩十九首)

行行道轉遠 去去情彌遲(文選卷二十五、西陵遇_レ風獻_二康樂_一、謝惠連)

③何時 不_レ戀時 雖_レ不_レ有 夕方任 戀無_レ乏(卷11・二三七三)

④隱沼 從_レ裏戀者 無_レ乏 妹名告 忌物矣(卷11・二四四一)

綺態隨_レ顔變 沈姿無_レ乏源(文選卷二十八、日出東南隅行、陸士衡)

⑤夕去 野邊秋芽子 末若 露枯 金待難(卷10・二〇九五)

金風扇_二素節_一 丹霞啓_二陰期_一(文選卷二十九、雜詩、張景陽)

「善曰、西方為_レ秋而主_レ金、故秋風曰_二金風_一」

30、人麻呂歌集の「詩風書式」は、あくまで詩風(漢詩風)であり、詩体(漢詩体)ではない

31、歌を記した可能性のある木簡など、歌集とは別の表記にあつては一般に仮名書き(萬葉仮名)表記であり、それに対して萬葉集である歌集は、巻5、14、15及び末3巻(巻17、18、20)を除いて基本的に訓字主体表記である。